

山と博物館

第29巻 第2号

1984年2月25日

大町山岳博物館



大町の給市 縁起売り 2月10日撮影

春近し

冬来りなば春遠からじとは雪国の言葉である。冬を迎える時のきびしい緊張も忘れ難い感觸であるが、二月半ばを過ぎたある日、北の空の片隅に、突然柔らかないブルルが膨らんでくる気配を感じる時、雪国の人々は皆ホツとする。今年も春は確実にやってくるだろう。

さて、昔は冬中、足にしもやけを作り乍ら俵を編み繩をなつた。木の根をかじる野ねずみの眼が昼間も光るような山の中で終日炭を焼いた。仕事はつらく文字通り困苦欠乏に耐え乍ら、お互いの心がどこかで支え合つて辛くも生きてきたという感じである。

今は文明の恩恵の中で、一年中西瓜が食べられる。家庭の中には物が溢れ、何でも手に入る。自動車TV海外旅行等々、作り過ぎたもの、処理をどうするか、最大のテーマである。

過剰に馴れ不足のもつ切実な情感から人々は益々遠ざかる。そして遂に遺伝子工学の技術が神の領域に一步ふみ込んでしまった。人間そのものは少しも進歩しえないのに、人間の作つた文明は異常な迄執拗に膨脹する事を止めない。人間を最小の単位として管理するコンピューターの効率化が際限なく進む。人間が独自の価値を支え切れなくなつた代りに、人間の幸福は方程式によって正確に計算されようとしている。春がきて忙しくなる前にもう一度自らの位置をゆっくり確めてみねばなるまい。それから種籾と肥料の準備をする。

椎茸のこまを打ち込み、種いもも揺る。庭の隅でまき割りをしていと普及所のAさんが雑誌を持ってきて、「やあ今日は珍しい風景に出あつたなあ、まき割りとは又なんと風情のある、写真にとつておきましようか」と言った。我が家がまきで風呂をわかつのは経済的理由で、風情とは関係ないのだが。

ここ数年異常気象で季節のメリハリがなくなり四年つゞきの不作である。毎年地球上で二千万町歩の森林が消滅して行くという。人間が地球をくいつくし共に亡びるような事があつてはならぬとしまりに思うのである。

播隆上人修行場跡を訪ねて

穂苅貞雄

私が昨年「槍ヶ岳開山播隆」を出版してから各地から播隆に関する新資料が次々と発見され、大変にうれしく思っている。また各地に播隆の熱心な研究者が現れ、活躍している。これからの未解明部分がさらに明かになっていくことと思う。

ところで、晴天の勤労感謝の日の十一月二十三日、岐阜県揖斐川町の播隆院一心寺において、午前には浄土宗の開祖法然上人の御降誕八五〇年法要、午後は一心寺開基の播隆上人生誕二〇〇年法要が、長野善光寺一條智光上人が導師となって盛大に行われた。私は播隆の末裔の中村俊隆氏らと共に参列したが、寺

の内外は、立錫の余地のない程、老若男女が集った。これ偏に法然上人、播隆の遺徳を偲ぶ揖斐の町の人達の篤い信仰心の現われである。今も町の人達は一心寺を「播隆サン」と親しく呼んでいるのである。揖斐の町の中には播隆の名号碑、六字名号の書軸など数点あることはわかってはいるが、その近くの関ヶ原町附近には、以前調査した時は何も見つけられなかった。

関ヶ原町はその昔、播隆が度々修行した伊吹山麓にあるので、何か遺物はあるだろうと思っていたところ、果せるかな、昨年末、一心寺住職安田成隆さんからの連絡で、関ヶ原町民俗資料館で播隆の遺物を数点



関ヶ原町玉区 不動滝(滝壺)

発見していることがわかった。その資料を送って頂いた。今回この機会に是非でもその中の、特に播隆の修行場跡と思われる場所を実地検分したいと思っていたので、法要の一日前に現地へ赴いた。まず関ヶ原町玉区にある伊吹山麓の不動滝(部落では「滝壺さん」と呼んでいる)を尋ね歩いた。町の老人から簡単な地図を書いても、山へ入ったがそれらしいものは発見できないので、更に詳しく書いてもらい再度尋ね歩いたが、夕暮迫る頃になっても見つかからないので、その日は本意ながら断念して宿へ帰った。翌日、民俗資料館から紹介された関ヶ原町史編纂委員であり、関ヶ原町附近の播隆の遺物をいくつか発見している藤井宏三氏、及び玉区



関ヶ原町玉 滝壺にある不動明王

のお不動様の役員の方の案内で、ようやく不動の滝へたどりついたのである。まず伊吹山ドライブウェイを車で二キロ程登り、雑木の茂る数の中の急坂を、木の根、笹などにつかまり五百程下った所の、深い沢の中に大岩が見えてきた。その下方に不動滝があるとのこと。さらに足もとに注意しながら下ると、岩棚に銅板で葺いた小さい祠があり、その傍に沢水が音もなく流れていた。さらに右方を廻りこみ下に降りてみると、高さ十メートルもある大岩から二筋の滝が、滝壺にザア／＼と流れ落ちていた。滝の傍には、直径一メートルかと思われる杉の大木があり、昔この附近に播隆が庵を結び籠っていたという。祠をあけると内に、唐金の不動明王が現われ、木立から洩れる太陽の光に、恐ろしい顔は異様にさえ見えた。台座には「文政九戌年、願主、播隆上人講中玉村惣中江祭置」とある。文政九年の夏は、播隆がはじめて槍ヶ岳偵察登山をした年である。総丈三十一センチの小さいものであるが、いかにも古い年代を物語るかのように所々腐蝕している。これを見ると玉の住民が播隆のすゝめにより、播隆講を作り、播隆と共に、念仏を唱えたものと確信を抱いた。現在でも玉区の住民は交替で当番をつとめ、毎年二月二十六日には、不動祭

りを行っているという。区その記録は明治十八年頃からのものが残されていて、それを見ると昔は米を不動様へ供え、農作物の豊作と無病息災を祈っていたことがわかる。現在、区の人達は播隆のいかなる人物かを全く知らずに不動祭をしているのである。玉には六字名号の軸など数点あるが、児玉作男氏所蔵の「奉願上候口上之覚」の古文書は誠に貴重なものである。これによると播隆は諸国を修行の後、文政八年頃、近隣の揖斐郡春日村の柏川山にも籠ったことがあり、その時玉村からも多数の村民が播隆の法話を聞きに行った。播隆は、村民に宗派に関係なく自分の宗派を大切に、御公儀様の定められたこと、御領主様の掟を守り、家内和睦しく暮らすことが肝要であると、いつもわかりやすく大変親切に話をされたので、村民は皆播隆に帰依したという。また玉村でも村民が播隆に暫く逗留して貰いたくして、庄屋が許可願をその筋に願ひ出ている。これをみると当時の播隆の高い人気がよくわかるのである。

関ヶ原町の隣の伊吹町、山東町にも名号碑六字名号の書軸などがあり、今後この周辺からさらに新しい遺物が発見される可能性があり、私はそうしたことを心から祈るものであ



岐阜県七宗町杉洞の岩窟

翌日は七宗町神淵にあるという岩窟を訪ねた。以前各務原市に住む平光圓治氏よりその場所を聞いていたので、地図を頼りにまず寺洞の播隆名号碑を写真撮影し、更に飛騨街道を北東へ進み杉洞部落に入った。所々で老人に播隆の岩窟を尋ねても知る人はいない。平光氏が以前案内してもらったという堀部寿之氏宅を尋ねるとその家はすぐわかった。堀部さんは、遠方からよく来たと私をねぎらいながら、早速岩窟へ案内してくれた。

ここは杉洞の東ヶ洞の入口で、上之保村、田尻へ抜ける町道から東へわずか登った所であり、高さ六尺、巾三尺、奥行五尺程の自然の洞穴で、右側奥に岩をくりぬいて、その中に播隆の名号碑があるではないか。平光氏の写真を前に見てはいたが、雨露を防ぎ岩窟の中にあつたので、百五十年も経た



杉洞の岩窟内の播隆の名号碑

とは思えない、全く新しく見える碑に心から感動した。碑は高さ四十八センチ、巾二十八センチで播隆の名号碑では最も小さいものである。播隆の花押の刻名があり、また文政六癸未年正月廿二日と刻まれているので、この当時播隆はこゝに参籠したことは明白である。岩窟の中の名号碑の前に、徳利、皿などがあり、供物を上げた痕跡があるので尋ねると、堀部氏は、毎年正月御神酒、鏡餅などを供え、不動様としてこの名号碑をお参りしているという。また岩窟の下方に十尺四方の平坦地があるが、昔はこゝに庵があり、部落の人達が念仏を唱えたと堀部氏は父から聞いていたとのことである。現在でも部落の人は正月、こゝに門松を立て、一年間の平穩無事を祈っていると

いう。杉洞の人は今

とある。この迫間(おせま)山不動滝は、現在の関市迫間にある迫間不動の奥ノ院の滝である。杉洞から飛騨街道を関市に入り、小さい山を越えて迫間不動を訪ねたが、途中道路工事中であつたので車を捨てて徒歩で行くと、目指す迫間不動はすぐわかつた。迫間不動は、その昔深山の中にあり、滝あり、岩窟ありの霊地で、迫間部落民の産土の大神として崇拝していたもので、明治維新後、不動講社が設立され附近一帯から現在も参詣人が後を絶たない。めざす不動滝は奥ノ院にあり、向って左側の岩窟には不動明王が祀られ、信者達のあげた沢山のローソクの灯が暗い岩窟内を明るくし、香がもうくとたちこめていた。

播隆は自分の寺として阿弥陀堂(現在の一心寺)を持つていたが、常住不在の念仏行者であつたので各地に修行場をもとめ参籠をし念

仏を布教していた。従来、播隆の修行場として知られていたものは、伊吹山の洞穴、播隆屋敷、各務原市大伊木の伊木山、飛騨高原郷の杓子窟、檜ヶ岳の坊主の岩小屋などである。播隆は好んでそうした所に修行場を求めたものである。そしてその修行につき、信州長尾組野沢村(現長野県三郷村野沢)庄屋 務台奥一右衛門景邦の書いた「公私年々雑事記」に「誠二行ハ厳敷事 一生涯木食ニテ、塩気ヲ断、毎日六ツ半時一食ニテ夫ヨリ後ハ終日一切食事不被成候」とあるように極めてきびしいものであつた。そうしたきびしい修行をつんだ播隆の話は、村民に強い感動を興え、村民はこそつて播隆に帰依したものとと思われるのである。

(槍岳山荘・槍沢ロッジ経営)



岐阜県関市の迫間不動

北ア山麓風物詩

ワカサギの穴釣り

長沢正彦

湖水のそばで育ったせい、正月が過ぎ小寒に入ると湖水の結氷が気になってしかたがない。今年こそ暖かく移動に簡単な小屋を造ろうか。又竿もあそこを改良したらどうかかなどと思いをめぐらす。

朝の気温がマイナス十度以下になる日が続く、いよ／＼ワカサギの穴釣りの季節到来である。まず最初に中綱湖が、そして木崎湖が結氷していく。氷の張りははじめは鏡のような薄氷でその上に雪が積りやがて人が乗っても割れない位厚くなる。氷の厚さは十五センチ以上ないと安全とはいえない。

硬い氷に苦勞をして穴を明け、身を切るようなアルプス嵐の中での穴釣りの寒さ冷たさは経験した人でなければわからない。しかし釣ったばかりのワカサギに塩をまぶしてコンロで素焼にしたのをふう／＼吹きながら口に入れ、片手に持った酒を流しこむ。このうまさも経験した人のみか知る醍醐味でもある。ワカサギはキウリウオ科の魚でサケ・マスのような北方系の淡水魚で、小さいながらもちゃん／＼と「脂ビレ」もある。

春に湖岸の川に遡って産卵し、秋には体長が五・六センチになり一年で成熟する。中綱湖・木崎湖などの仁科三湖でも春先群をなして遡上する親魚を捕え、人工採卵し、発眼後再び湖へ放流している。

ワカサギは群を作って遊ぶ習性があるので、ちょうどその群にあたる如初心者でも思わぬ大漁となり、穴釣りの魅力に引きこまれることになる。

カチ／＼に凍った冬の朝の早起きはつらいものであるが、好きな事をする朝は眼さま

時計もいらぬし、寒さも苦にならない。防寒装備をガッチリとして、魚屋からもらったきた発泡スチロールの箱に釣具一式、穴あけ用兼護身の棒、それに酒を持って出かける。冷えきつた雪面が足をおろすたびにギュー



木崎湖の穴釣り

キューと鳴る。雪明りの中に釣人達の電灯がチラ／＼している、夏の灯笼流しの灯のようである。はやる気持を押え水面に穴を明けはじめる。片足が入る位の穴を明け、砕けた氷は魚を入れるザルですくい取る。凍える指先で小さな鉤にエサをつけ仕掛をおろす。

私の使っている竿はハガネを細く削って仕上げたもので、微妙な当りも逃さないように工夫した自慢のものである。昔は道糸も馬糸(馬の尻尾の毛)を二・三本より合せて使っていたそうであるが、今はナイロン糸になり便利になった。

当りを待つ間もなく穂先がビクッ／＼と続くと、続いてブル／＼ときたらすばやく竿を置き、右手を穴上に差し出し、左手でどん／＼とぐり上げていく。やがて穴の中から勢いよく白い魚体がおどり出る。この一瞬のために眼いのも寒いの冷たいのもがまんして出てくるのである。

釣れたワカサギは下に引っぱるか、ひねって鉤からはずす、上あごが軟かいので引っぱると簡単に切れてしまうからである。ここでワカサギ釣りのコツをまとめてみると(1)早起きする。日の出前か夕方氷の状態が安全である。(2)、タナを正確につかむ。(3)、竿を上下させていつも誘ってやる。

(4)、釣れだしたら動作はすばやく、一番興奮する時で、そのため糸がからんだり、仕掛がお祭りに

なつたりのトラブルが起きやすい、道糸なども黒・赤など見分けやすいものを使う。

釣ったワカサギは天ぷらにしたり、フライにしたりいろ／＼の料理の仕方があるが、ここではわが家の佃煮の作り方を披露しよう。

- (1)ワカサギを丸のまま水洗いしてザルに移し水気を切る。
- (2)大鍋に醤油と砂糖を入れてよく混ぜる(好みによって砂糖の量を多くしたりする)
- (3)シヨウウガを薄く切っておく。
- (4)汁の中に水を切ったワカサギを入れ平らにし、汁がワカサギの上までヒタ／＼にする。
- (5)厚紙で鍋ぶたを作りワカサギ全体を覆うようにして煮汁が全体にあたるようにする。
- (6)鍋を火にかける。五分位は強火であとは中火でゆっくりと汁がなくなるまで煮つめる。
- (7)汁がなくなってきた頃、鍋を両手で持つて二・三回ひっくりかえす。姿が崩れないようにハシは使わない。
- (8)汁が少量残る程度で火を止め、冷ましてできあがり。水を使っていないので十分保存食となる。

近年急速に変わりつつある自然環境、仁科三湖も例外ではない。木崎湖におけるコカナダモの異常繁殖などはその最たるものであろう。周知のとおり湖の中は目に見えないプランクトンから大型魚類までが相互に関連し、自然の平衡が保たれている。その一端が崩れると前述のコカナダモのような状況になってしまう。冬の風物詩、ワカサギの穴釣りも人と自然との出会いから始まり、調和の中から冬の楽しみとされてきた。この楽しみがいつまでも続くように自然環境をみんなが大切にしたいものである。

(山岳博物館友の会)

山と博物館 第29巻 第2号

発行所 長野県大町市 TEL220221
 大町山岳博物館
 印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
 大系タイムス印刷部
 定価 年額一、二〇〇円(送料共)(切手不可)
 郵便振替口座番号 長野四一三一三九三